

奈良県五條市西吉野地域における柿生産の現状と活性化に向けた生産者の取組み

地方創生が叫ばれる今、地域においては、自らの特性を活かした魅力づくりで生き残ることが喫緊の課題となっている。全国有数の柿産地である奈良県五條市西吉野地域では、若手農業経営者による農産物の加工・販売、カフェ・農家民宿の経営等、新たな取組みが見られる。同地域の若手農業経営者の取組みを通じて、地域の特性を活かした活性化について考察したい。

要 約

- ①奈良県の農業算出額は全国 44 位（432 億円）に過ぎないが、果実の産出額は同 27 位（84 億円）で、柿産出額は同 2 位（64 億円）。
- ②五條市西吉野地域は、1974 年から行われた国営農地開発事業により大規模な農地造成が進み、全国有数の柿産地に成長。同地域の販売農家のうち 8 割以上が柿を栽培しており、広い耕作地による大規模経営で販売金額が大きい。基幹的農業従事者の平均年齢は 61.8 歳と、奈良県平均（68.8 歳）や全国平均（66.1 歳）に比べ若い。
- ③同地域は柿生産に強みをもつ一方、人口減少・高齢化の進展という課題を抱えている。また全国的に若年者層における柿の消費額は高齢者層に比べ小さい。こうした中、若手農業経営者は、自らの生産する柿の付加価値創造と地域活性化を目指して、新たな事業に取り組んでいる。
- ④同地域が今後、柿生産という強みを活かし一層の発展を果たすには、ブランディングによる適切な価値の発信と、消費者ニーズへの対応およびファンづくりによる新たな需要の開拓、地域の内外を問わない他業種との連携による新たな価値の創造が望まれる。
- ⑤行政においても、柿を奈良県農業を牽引する品目と位置付けて振興を図る中、柿の主産地である同地域の活性化に期待が高まっている。

1 奈良県農業の特徴

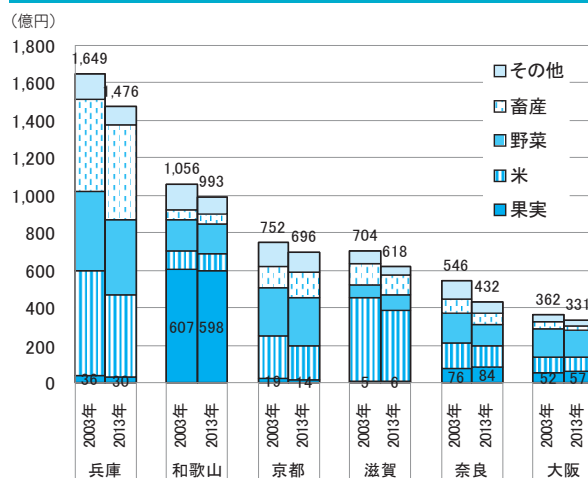
本章では、奈良県農業の特徴を近畿 2 府 4 県と比較しながら簡単に振り返りたい。

1. 奈良県農業産出額は全国の 0.5% で 44 位

奈良県は可住地面積が 851km² と全国一狭く、県土面積 3,691km² の約 23% に過ぎない。農林水産省「農業産出額及び生産農業所得」によれば、奈良県農業産出額は全国 44 位の 432 億円で、全国（85,748 億円）の 0.5% に過ぎず、近畿では大阪府（331 億円、全国 46 位）に次いで少ない（図表 1）。

また高齢化や担い手の減少、農作物価格の低迷等を理由として土地の転用や耕作放棄地が増加しているため、2013 年の奈良県農業産出額は 2003 年（546 億円）比で 20.9% 減少している。

図表 1 農業産出額の比較（近畿 2 府 4 県、2003 年 - 2013 年）



資料出所：農林水産省「農業産出額及び生産農業所得」（2003 年、2013 年）

2. 奈良県の柿産出額は全国 2 位の 64 億円

減少している農業産出額とは対照的に、2013 年の奈良県の果実産出額は全国 27 位の 84 億円と、2003 年（76 億円）比で 10.5%増加している。

中でも柿は全国 2 位の 64 億円と、2003 年（50 億円）比で 28.0%増加し、1 位の和歌山県（89 億円）に迫っている。

奈良県の農業産出額を品目別にみても、柿は県内農業産出額の 14.8%を占め、米（110 億円、同 25.5%）に次いで 2 番目に多い（図表 2）。

3. 全国有数の柿産地・五條市西吉野地域

そこで本稿では、奈良県の特産品であり、奈良県から県農業を牽引する「リーディング品目」に指定されている「柿」に着目する。中でも、全国有数の柿産地である五條市西吉野地域*に焦点を合わせ、地域の現状を探る。

※本稿では、2005 年に旧大塔村とともに五條市と合併された旧西吉野村を「西吉野地域」として定義（図表 3）し、同地域についてのデータがある場合には独立して分析を行うこととする。

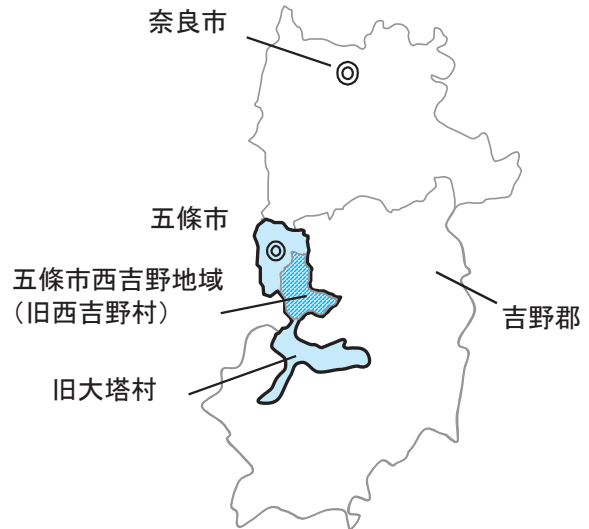
五條市は市町村単位の柿収穫量で全国 1 位を誇り「日本一の柿のまち」を標榜している。特に柿

生産の盛んな西吉野地域は、以前から加工や直売等が進んでいることに加え、近年になって若手農業経営者による新たな取組みも見られるためである。

2 五條市西吉野地域の現状

本章では、西吉野地域における柿生産の現状について概観する。

図表 3 奈良県五條市西吉野地域の地図



資料出所：国土交通省国土地理院「全国都道府県別・市町村合併新旧一覧図」より当研究所作成

図表 2 産出額上位 5 品目の全国順位、産出額、割合（近畿 2 府 4 県）

都道府県名	農業産出額計			産出額上位5品目														
	全国順位	産出額(億円)	構成比(縦%)	1位			2位			3位			4位			5位		
				全国順位	産出額(億円)	割合(横%)	全国順位	産出額(億円)	割合(横%)	全国順位	産出額(億円)	割合(横%)	全国順位	産出額(億円)	割合(横%)	全国順位	産出額(億円)	割合(横%)
兵 庫	計			米			鶏卵			肉用牛			生乳			たまねぎ		
	21	1,476	1.7	15	440	29.8	11	162	11.0	14	118	8.0	11	100	6.8	3	90	6.1
和 歌 山	計			みかん			梅			米			柿			桃		
	30	993	1.2	1	248	25.0	1	134	13.5	42	89	9.0	1	89	9.0	4	45	4.5
京 都	計			米			鶏卵			茶(生葉)			生乳			荒茶		
	37	696	0.8	33	185	26.6	27	54	7.8	4	42	6.0	34	34	4.9	4	31	4.5
滋 賀	計			米			肉用牛			生乳			鶏卵			大豆		
	41	618	0.7	18	377	61.0	27	54	8.7	37	25	4.0	39	19	3.1	8	11	1.8
奈 良	計			米			柿			生乳			いちご			ほうれんそう		
	44	432	0.5	41	110	25.5	2	64	14.8	36	28	6.5	23	18	4.2	16	18	4.2
大 阪	計			米			ぶどう			ねぎ			なす			みかん		
	46	331	0.4	43	81	24.5	6	35	10.6	18	23	6.9	11	21	6.3	18	15	4.5
近 畿	計			米			鶏卵			みかん			肉用牛			生乳		
	-	4,546	5.3	-	1,282	28.2	-	269	5.9	-	268	5.9	-	204	4.5	-	204	4.5
全 国	計			米			生乳			豚			肉用牛			鶏卵		
	-	85,748	100.0	-	17,864	20.8	-	6,844	8.0	-	5,793	6.8	-	5,587	6.5	-	4,765	5.6

資料出所：農林水産省「農業産出額及び生産農業所得」（2013年）より当研究所作成

1. 西吉野地域の販売農家の8割以上が柿を栽培

農林水産省「世界農林業センサス」(2010年)によれば、西吉野地域の販売農家は474戸。うち果樹栽培農家は395戸で、販売農家の83.3%を占める(図表4、図表5)。

このうち柿を栽培している農家は386戸に上り、これは果樹栽培農家の97.7%に相当する。つまり、西吉野地域の販売農家の8割以上は柿を生産していると言える。

また、西吉野地域では柿と併せて梅(305戸(果樹栽培農家の77.2%))や梨(24戸(同6.1%))等も栽培されている。複数の果樹を組み合わせることで、不作・豊作時のリスク分散や、収穫タイミングをずらし季節性に対応していると見られる。

2. 基幹的農業従事者は平均61.8歳

西吉野地域の販売農家の基幹的農業従事者*は928人で、平均年齢は61.8歳である。奈良県平

図表4 販売農家・果樹栽培農家の定義

販売農家	経営耕地面積が30a以上又は調査期日前1年間における農産物販売金額が50万円以上の農家
果樹栽培農家	販売農家のうち、販売を目的に果樹を栽培している農家(自給用のみを栽培している場合は含めない)

資料出所：農林水産省「世界農林業センサス」(2010年)をもとに当研究所にて加筆修正

図表5 奈良県・品目別果樹栽培農家数(柿栽培農家数上位5市町村)

市町村	販売農家数 (戸)	果樹栽培実農家数										販売農家の 基幹的農業 従事者数 (人)		
		柿		梅		温州みかん		ぶどう		梨(日本なし)				
		(戸)	(%)※1	(戸)	(%)※2	(戸)	(%)※2	(戸)	(%)※2	(戸)	(%)※2			
奈良県	15,040	1,609	10.7	1,133	70.4	497	30.9	171	10.6	150	9.3	134	8.3	16,085
五條市	1,458	748	51.3	709	94.8	354	47.3	6	0.8	8	1.1	55	7.4	2,185
西吉野地域	474	395	83.3	386	97.7	305	77.2	2	0.5	1	0.3	24	6.1	928
天理市	1,330	137	10.3	106	77.4	11	8.0	32	23.4	19	13.9	-	-	1,643
下市町	177	92	52.0	77	83.7	53	57.6	-	-	4	4.3	6	6.5	246
御所市	872	68	7.8	46	67.6	10	14.7	4	5.9	10	14.7	1	1.5	688
明日香村	313	76	24.3	32	42.1	8	10.5	45	59.2	16	21.1	1	1.3	305

※1 果樹栽培実農家数が販売農家数に占める割合

※2 各品目栽培農家数が果樹栽培実農家数に占める割合(1戸の農家が複数の果物を栽培している場合もあるため、足しても100%とにならない)

資料出所：農林水産省「世界農林業センサス」(2010年)

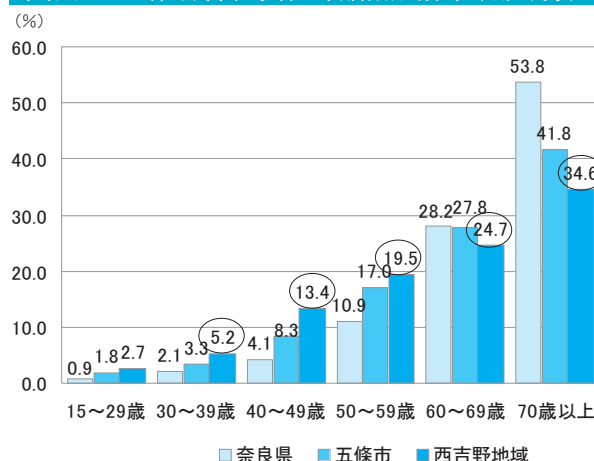
均(68.8歳)や全国平均(66.1歳)に比べ若い点特徴的である(図表不掲載)。

※自営農業に主として従事した世帯員のうち、ふだん仕事として主に自営農業に従事している者。

年齢階級別の分布で見ると、西吉野地域では働き盛りの30~39歳の割合が5.2%、40~49歳の割合が13.4%を占める(図表6)。それぞれ奈良県平均に比べて3.1ポイント、9.3ポイント高く、いずれも奈良県平均を上回っている。

西吉野地域で若年者が比較的多く農業に携わっている理由として、第1次産業が主産業であるということ(図表7)の他に、販売農家1戸当たり

図表6 基幹的農業従事者の年齢階級別分布(販売農家)



資料出所：農林水産省「世界農林業センサス」(2010年)より当研究所作成

の経営耕地面積が広い（図表8）ため、大規模経営が可能で、販売金額（収入）も確保できている（図表9）ことが考えられる。

3. 「国営総合農地開発事業」で大規模化進む

五條市ホームページによれば、西吉野地域における柿生産の歴史は、大正末期に農家が現金収入を得ることを目的に、既存の耕地を柿に転換し、あわせて開墾が進められたことに始まるという。

昭和初期には、現在でも生産量の多い甘柿品種「富有柿」の生産が本格化。1950～60年代にかけて柿生産の用地が造成された。1974年、全国各地において農業の近代化・大規模化を目的として進められた「国営総合農地開発事業」が当地域においてもスタート。それまで開墾が困難であった荒れ山や急峻地も開墾が進み、造成地を農家が積極的に購入した。あわせて柿農家では、収穫時期が通常より早い早生種の渋柿を新植したことで、柿栽培において最も労力を要する収穫時期を分散できるようになり、効率経営による収入の増加に繋がった。

また、西吉野地域では、共販組織である西吉野選果場を中心に各農家が連携して卸売市場への安定的な柿の供給を実現したことで、全国有数の大規模な柿産地にまで発展を遂げた。

現在ではハウス柿や冷蔵柿等、季節を通じて出荷する工夫もなされ、競争力強化に繋がっている。

図表7 産業別就業者数

	総人口 (人)	就業者数※		(参考)		
		(人)	(%)	第1次産業 (%)	第2次産業 (%)	第3次産業 (%)
奈良県	1,400,728	596,525	2.5	2.7	24.1	73.2
五條市	34,460	15,086	14.2	14.7	25.0	60.3
西吉野地域	3,065	1,594	53.6	54.9	13.2	32.0

資料出所：総務省「国勢調査産業等基本集計」（2010年）

※就業者数には分類不能の産業を含む（割合は就業者数から分類不能の産業を除いて算出）

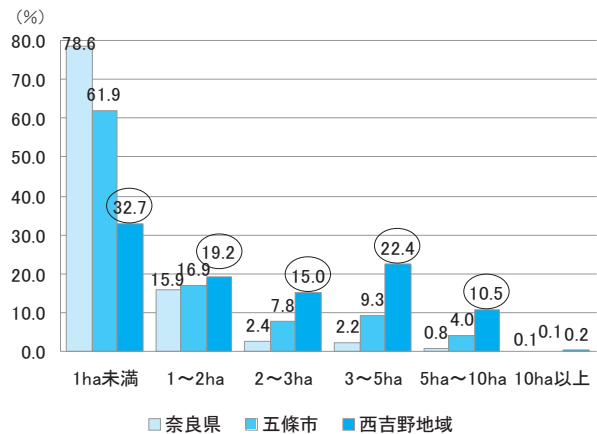
3 五條市西吉野地域が直面する課題

本章では五條市西吉野地域が直面している課題について考えたい。

1. 30年間で4割の人口減少、進む高齢化

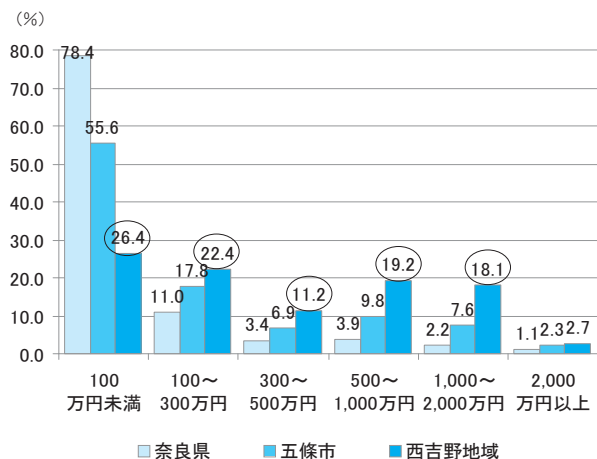
総務省「国勢調査」によれば、1980年からの30年間で西吉野地域の人口は40.8%減少し、高齢化率（65歳以上人口の割合）も21.1ポイント上昇（図表10）。人口減少・高齢化のいずれもが、奈良県や五條市を上回る速度で進展している。

図表8 奈良県販売農家の経営耕地面積規模別分布



資料出所：農林水産省「世界農林業センサス」（2010年）より当研究所作成

図表9 奈良県販売農家の販売金額規模別分布



資料出所：農林水産省「世界農林業センサス」（2010年）より当研究所作成

2. 若年世代で低い柿への支出

総務省「家計調査」によれば、2014年の柿の1世帯当たり年間支出金額（総世帯）は1,006円で、果物全体と同様に横ばいの動きである（図表11）。

柿の年間支出金額を世帯主の年齢階級別（二人以上の世帯）に見ると、世帯主が60歳以上の世帯（年間支出金額1,500円程度以上）と、同49歳以下の世帯（同500円程度以下）との間で支出金額に開きが見られる（図表12）。

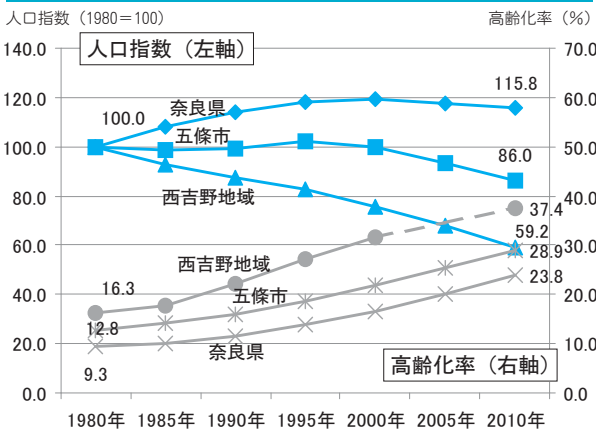
若年世代では柿をはじめ果物全般の消費が低迷する中で、図表11のとおり果物加工品については支出金額が増加傾向にあることから、カット果物やドライフルーツ等への加工により、手軽に食べられる果物への需要は高いと考えられる。

3. 柿生産に加え求められる新たな取組み

以前から西吉野地域においては、いち早く大玉栽培による高付加価値化やハウス柿・冷蔵柿で出荷時期をずらす等の工夫を重ね、産地としての競争力を高めてきた。柿生産は今後も西吉野地域の経済を支える重要な産業であることは間違いない。

一方で、消費者の嗜好が変化する中、柿生産に

図表10 奈良県人口および高齢化率の推移



資料出所：総務省「国勢調査」より当研究所作成

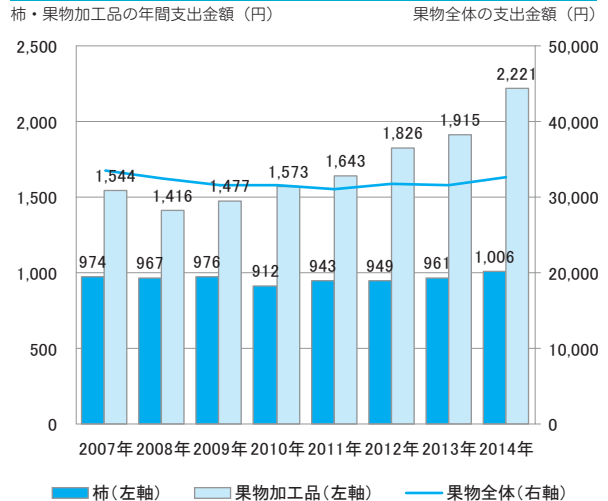
注：高齢化率は65歳以上人口の割合を指す。
2000年以前の五條市は、旧五條市・旧西吉野村・旧大塔村を合算して算出。
2005年の西吉野地域の高齢化率はデータなし。

においても消費者のニーズをとらえた上で、若年世代等の新市場の開拓や、ドライフルーツ等の新たな付加価値創造等の取組みが求められている。

4 西吉野地域の柿生産者による取組み

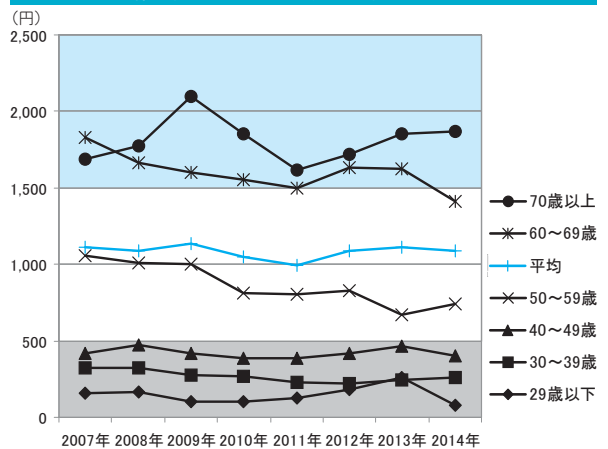
ここで、西吉野地域の活性化に向けて、積極的に新たな事業に取り組んでいる若手農業経営者を訪ね、現在の取組みの概要や、成功のポイント等について話を伺った。（掲載は50音順）

図表11 支出金額の推移（総世帯）



資料出所：総務省「家計調査」

図表12 柿の年間支出金額推移（世帯主年齢階級別・二人以上の世帯）



資料出所：総務省「家計調査」

株式会社堀内果実園

株式会社堀内果実園は、自社農園で採れた柿や果実加工品を小売店に卸し、消費者への直接販売や海外輸出等で販路を広げる事業者である。

同社の主力商品は、この地域で多く植えられた渋柿の一種、「平核無柿^{ひらたねなし}」である。渋柿は一般的に炭酸ガスで脱渋されてから青果市場に流通するが、脱渋する間に果実が熟し食感が柔らかくなりがちである。同社では、脱渋に気化アルコールを用いることで脱渋時間を短縮し、完熟状態でもサクサクの食感を楽しめるといふ。

同社は現在、農産加工品の生産・販売に力を入れる。自社加工工場「grove^{ぐろおぶ}」では、渋柿の脱渋^{ふゆう}の他、富有柿や南高梅、カリン、ブルーベリー等のコンフィチュール（ジャム）、各種ドライフルーツ、ジュース等を生産。「適熟」の果物を利用し、添加物を使用せずに素材のおいしさをそのまま引き出した加工品には定評がある。

中でも「百年柿^{かき} 嘉来」は、樹齢百年超の富有柿の木から採れた柿の実だけを用いて高温の温風で無添加加工し、羊羹のようにとろりとした甘味と食感のあんぼ柿に仕上げた逸品である。

同社代表取締役の堀内俊孝氏は、柿農園と加工工場を経営する一方、西は九州・博多、東は東北・仙台まで全国の百貨店に自ら足を運び、商品をバイヤーに売り込む。こうした地道な営業努力が実を結び、同社商品を取り扱う店舗は年々増加しているという。

同社は食品加工会社として衛生管理を徹底し、バイヤーからの信頼感を高めている。と同時に、農業生産者としての視点で「自然の果物を活かした商品づくり」にこだわる。自然の食品や健康に関心を持つ若年女性らに向け、ホームページやFacebook等を通じて自社の提供するブランド価

値を積極的に発信し、消費者との距離を縮める努力をしている。

近年では、展示即売会への出展で得られた売上データを分析、どの顧客層に何が売れるかを予測した上で商品を納入することで、欠品・在庫リスクも低減している。

また同社では、台湾・シンガポールへの商社を介した輸出にも注力し、着実に成果を挙げている。

堀内社長は「ここ西吉野には、柿の大家や一大農業ネットワークを築いた経営者等の偉大な先輩がいてお世話になってきた。自分はその後に続こうという気持ちでやっているし、そう考える若者がもっと増えてほしい。西吉野地域だけでなく、奈良県中南部一帯が相互に連携して、たとえば『吉野ブランド』で魅力を発信していく等の取り組みが必要」と感謝とともに思いを語る。

株式会社堀内果実園

代表取締役 堀内 俊孝 氏 (43 歳)

所在地：奈良県五條市西吉野町平沼田 1393

事業：柿等農産物の生産・加工・販売

農地：柿 5ha 梅 1.5ha カリン 0.3ha ブルーベリー 0.2ha 等

URL：<http://horiuchi-fruit.jp/>



人気商品のあんぼ柿 (上)



堀内社長 (写真中央) と同社従業員ら (下)

株式会社柳澤果樹園

株式会社柳澤果樹園は、柿生産を中心に、柿や果実加工品の直売・輸出、野菜生産やカフェ・農家民宿の経営等、新しい事業に取り組んでいる。

同社代表取締役の柳澤佳孝氏は、100年前に植えられた甘柿品種「富有柿」を中心に、厳正な品質管理と生産量の確保を通じて大手流通小売と直接取引を実現、安定的に売上を確保。加えて、ブランド柿「霜朱宝」^{しものたから}のネット直販も行う。寒くなると柿が凍結を防ぐため糖度を高める性質を活かし、霜が降りる12月上旬にまで収穫を遅らせることで甘みを増した柿である。一個一個袋がけする等手間もコストもかかるが、同社では積極的に自社の取組みを顧客に向けてホームページやブログを通じてPRし、価値を発信している。

同社は西吉野地域の他にも、奈良県御所市から和歌山県九度山町まで一帯に複数の農場を持ち、柿や梅等の果樹や、ミョウガ等の野菜を生産。複数作物の栽培で収穫時期をずらし、労働集中や不作・豊作に伴うリスクを低減する。

同社が経営する「Cafe こもれび」は、手作りの石窯で焼かれたピザが自慢。自家栽培の野菜を用いたサラダ、自家製の柿ジャム等加工品を使ったデザートが人気のカフェで、幅広い年齢層の女性客が訪れる。

カフェの隣には農家民宿も建てられ、「この地

「Cafe こもれび」全景（下）



カフェ屋上に設けられた宿泊者専用の露天風呂（上）

まで足を運んでくださったお客様と触れ合う時間を大切にして、この地域のファンを作りたい」という柳澤社長の意向で1日1組限定の一棟貸しとしている。カフェ屋上に設けられた宿泊者専用の半露天風呂からの眺めは絶景で、農家の心づくしの家庭料理に惹かれるリピーターも多い。

近年では、自身が役員を務める輸出商社を介した、タイやカンボジア等の新興国富裕層向けの柿や加工品輸出に力を入れる。

カンボジアで現地の農業指導を行った経験も持つ柳澤社長は、「土地が痩せ水不足に見舞われるカンボジアでの苦労を経て、森や水資源が豊富な故郷・西吉野地域がいかに恵まれているかを実感した」と語り、貴重な自然環境を守るため耕作放棄地再生にも取り組んでいる。

株式会社柳澤果樹園

代表取締役 柳澤 佳孝 氏（41歳）

所在地：奈良県五條市西吉野町湯塩 221

事業：柿等農産物の生産・加工・販売、カフェ・農家民宿・直売所の運営

農地：柿 5ha 梅 1ha ミョウガ 1ha ブルーベリー 0.2ha 等

URL：<http://www.0141kaki.com/>

タイ・バンコクの展示会にて柳澤社長（下）



吉野杉箱入りの「霜朱宝」（上）

5 五條市西吉野地域の更なる発展に向けて

西吉野地域が柿産地として更なる発展を遂げるうえで重要と思われるポイントを、両社への取材の結果を踏まえて以下の通り整理した。

1. ブランディングによる適切な価値の発信

両社は、「百年柿」や「霜朱宝^{しものたから}」等の商品特性をよく表すネーミングを施しながら、商品の独自性や優位性をPRすることで、商品の価値を適切に発信し、結果として消費者から価格への理解を得ることに成功している。

生産者の努力により、西吉野地域の柿の品質はすでに市場から高く評価されているが、消費者の認知度はなお向上の余地があると思われる。折しも、地理的表示保護制度（GI）^{*}が2015年6月より施行された。これを機に、柿生産者が連携し地域ブランドを消費者に発信することが望まれる。

※農産物等の品質や特性等が産地と結び付いている場合に、地理的表示（結びつきを特定できるような名称）を知的財産として保護する法律。登録初日（6月1日）には、奈良県から「三輪素麺^{みわそうめん}」が登録申請を行っている。

2. 消費者ニーズに対応した新たな需要の開拓

両社はいずれも、自然派志向・健康志向の女性や新興国の富裕層等の新たな購買層に狙いを定め、彼らの感性に合った商品のデザインとニーズを捉えた商品展開で、新たな需要の開拓に取り組んでいる。

アプローチは両社で異なるものの、生産者の想いやこだわりを発信することで消費者と「顔の見える関係」を築き、良質な商品（またはサービス）の提供でファンとなるリピーターを生んでいる点は共通している。

一連の取組みは自社のブランド価値を向上させ

るのみならず、結果的に西吉野地域のファンづくりにもつながるため、他生産者がこれに引き続き、新たな魅力を発信することが望まれる。

3. 人的ネットワークによる価値の創造

両社ともに、経営者は秀でた栽培技術を持つ農家や、優れたデザイナー、バイヤー等、地域の内外で積極的に人的ネットワークを形成しており、それが自社事業の付加価値創造に貢献している。

西吉野地域では、「柿の里まつり」が例年11月下旬に開催され、1日で5千人もの集客がある他、柿のシーズン中には直売所や観光農園も大いに賑わう。この時期に合わせて、地域内外の他業種と連携することで、西吉野地域は更に魅力を高めることができるだろう。たとえば、豊かな自然と重厚な歴史文化を誇り、「吉野杉」「吉野葛」等の名品を持つ「吉野ブランド」と連携しながら、柿のある景観や食文化を観光産業とともに発信する^{*}等の取組みも考えられよう。

※長野県下伊那郡高森町^{たかもりまち}では、特産の干し柿「市田柿」を地域ブランドとして活用し、民家の軒先に市田柿が吊るされた風景を楽しむ「柿すだれツアー」を企画する等、独自の魅力の発信による地域づくりに取り組んでいる。

おわりに

柿は奈良県農業を牽引する品目の一つであり、全国2位の柿生産量を誇る奈良県では、行政においても柿の振興を図っているところである。

こうした中、全国有数の柿産地である西吉野地域における若手農業経営者の取組みは地域の魅力を発信するもので、人口減少・高齢化が進む地域の活性化に一石を投じている。

一連の取組みが、観光産業等の他業種を巻き込んだ継続的な地域活性化に繋がることに期待が高まっている。 （太田宜志）